

2009年版 学長が新生に薦める100冊の本 ～女性作家(好きな作品、印象深いものです)

	書名	編著者名	一言コメント
1	源氏物語	紫式部(著)、円地文子(訳)	別格!! 昨年(2008年)は源氏物語千年紀でした。日本が誇る代表的な古典を、現代訳で読んでみませんか。現代訳の最初の与謝野晶子ものは、やはり古文でしょうか、ついで、円地文子、田辺聖子、瀬戸内寂聴、大塚ひかりまで、5人の女性作家による訳があります。私は、現在、寂聴訳を読破中です。
	新源氏物語	紫式部(著)、田辺聖子(訳)	
	源氏物語	紫式部(著)、瀬戸内寂聴(訳)	
	源氏物語：大塚ひかり全訳	紫式部(著)、大塚ひかり(訳)	
2	十三夜	樋口一葉	月明かりの晩に、ある女性の切ない人生が一時くっきりと照らし出されます。文語体で読みづらいですが、格調高い日本文、ぜひ声に出して読んでみましょう。何度か読めば、判る。
3	鶴は病みき	岡本かの子	芥川龍之介がモデルの本書。著者の夫一平との複雑微妙な生き方は、寂聴「かの子繚乱」で復活します。大阪万博太陽の塔の作者マルチ芸術家岡本太郎の母親でもあります。
4	放浪記	林 芙美子	でんぐり返りがウリだった森光子の舞台が有名だが、原作は、第一次大戦後の東京で、貧困にも負けず、たくましく生きる女性、著者の転々とした生活記。ちょっと古いかな。
5	秀吉と利休	野上弥生子	中世日本の覇者秀吉は、何故、敬愛していたわび茶の完成者千利休に切腹を命じたのか、格調高い硬質な文章ですが、挑戦して下さい。臼杵市出身、100歳まで現役でした。
6	生きて行く私	宇野千代	90代後半で、死ぬ気がしないとおっしゃっていた著者の自伝ですが、男性遍歴とも云えます。ただし、お相手は芸術家たちで、とっかえひっかえ...そこがこの方のすごいところ。
7	華岡青洲の妻	有吉佐和子	1804年、曼陀羅華(朝鮮あさがお)で世界初の麻酔乳がん手術をおこなった医師華岡青洲の成功には妻と母の壮絶な献身があった。40年前の出版ですが、今読んでも新鮮です。
8	流れる	幸田 文	著者は、明治の文豪幸田露伴の娘。父の死後、生活のため住み込んだ芸者の置屋の経験を書いたもの。一見華やかで陽の世界の裏にある置屋という陰の世界を描いた名作です。
9	權	宮尾登美子	昨年のNHK大河ドラマ『篤姫』原作者の自伝4部作の1。貧しくとも、確固として信念をもつ土佐の女性の波瀾万丈の人生を描いた著者の出世作、私はこれで宮尾本にはまりました。
10	塩狩峠	三浦綾子	自分の命を犠牲にして他人の命を救う主人公の生き方に、無償の愛や、信仰を持って生きることについて深く考えさせられます。赤十字のhumanityを思っ読んでみました。
11	サンダカン八番娼館	山崎朋子	19世紀、東南アジアで娼婦として働いた女性「からゆきさん」は、島原や天草出身が多かったとか。その壮絶かつ過酷な生活をたどったノンフィクション。映画にもなりました。
12	大地の子	山崎豊子	主人公は中国残留日本人孤児。戦後の混乱期の過酷な状況や、生みの親と育ての親の愛情など、読みながら涙せずにはいられません。読み応えのある小説。
13	神の汚れた手	曾野綾子	産婦人科医を主人公に、中絶と生命の尊厳を描いた、ちょっと重い作品。今も開発や国際問題にも積極的に発言される著者からは目が離せないし、他にも読みたい作品沢山。
14	鍋の中	村田喜代子	北九州出身の著者の出世作、人生に達観した高齢者が書いたのかと思うものと、若々しい青春小説的なものの中に、いのち、生活を感じさせる文言があり、楽しくかつ重い短編集。
15	婉という女	大原富枝	江戸時代の土佐藩執政の娘(婉)の壮絶な実人生のドキュメンタリーとも読める。重くつらくすらすら読めない。けど、止められない。40年の幽閉の後の生き方。読んでみて下さい。
16	津田梅子	大庭みな子	日本人女性初の留学生としてアメリカへ渡り、後の津田塾大学を創設した津田梅子。女性の教育に力を注ぎ、まっすぐに進む彼女の姿勢に感銘を覚えます。
17	智恵子飛ぶ	津村節子	高校時代熱中した「そんなにもあなたはレモンを待つてみた」ではじまる光太郎の「智恵子抄」。光太郎への愛と芸術への懊悩、高潔しかし息が詰まる思いで読んだ本です。
18	真昼へ	津島佑子	急逝した息子への鎮魂歌と紹介されていたのですが、後に読んだ「火の山ー山猿記」への伏線のようにも思えます。「斜陽」の太宰治の次女、作品は数カ国語訳されているそうです。
19	南方熊楠	鶴見和子	博物学者・粘菌研究者・民俗学者南方熊楠<ミナカタマクス>の入門書ですが、比較社会学者、また、近代の女性随一の知性でもある著者そのものにも触れられる書です。
20	思い出ランプ	向田邦子	短編小説の名手、日常にある「ドラマ」の切り取り方がお見事。TVドラマ「時間ですよ」や「七人の孫」も作品。猫がお好きだったそうですが、1981年、台湾での飛行機事故で死亡。
21	残花亭日曆	田辺聖子	大阪弁を縦横に行使した作品、特に随筆の常連であったご夫君こと「カモカのおっちゃん」の闘病、介護と死までの日記。著者ならではのユーモアと温かみが心に沁みる一冊です。
22	白蓮れんれん	林 真理子	飯塚市の旧伊藤伝右衛門邸は、姦通罪(判りますか?)があった時代に、若い新聞記者との愛を成就した伝右衛門の妻歌人柳原白蓮が暮らした所。著者は愛物語の名手です。

	書名	編著者名	一言コメント
23	岩倉具視：言葉の皮を剥きながら	永井路子	昨年来はまっている幕末もの、歴史に名を残している人物を取り上げつつ、新たな歴史学を読む思いです。歴史はあったかも知れない小説、小説はあったかも知れない歴史・・・ですね。
24	夜のピクニック	恩田 陸	全校生徒が24時間かけて80キロを歩く高校の伝統行事。主人公は、ある思いを抱いてこの行事に臨みます。あなたは友人とどのような高校時代を過ごしましたか？
25	死の泉	皆川博子	著者の直木賞受賞作。廊の女性を描いた「恋紅」も好きですが、本書の舞台は、第二次世界大戦時のドイツ、美と悪の黙示録との解説。知らずに読めば、外国人の作品かと思えます。
26	キッチン	吉本ばなな	色々な分野で活動、人気の高い著者の作品は、世界各国語に翻訳されていますが、特に人気を博した本書は死と生の対比、また、作品を流れる独特の雰囲気的魅力的です。
27	白道	瀬戸内寂聴	「花芯」で衝撃的デビューされた後、多作の著者の作品のほとんどは読みましたが、西行の秘めたる想いを描いた本書と、仏陀の最後の日々を描いた「釈迦」が最高です。
28	OUT	桐野夏生	平凡な主婦たちがある事件をきっかけに共犯者となり、日常を離脱していく推理小説。米ミステリー界のアカデミー賞といわれるエドガー賞にもノミネートされました。
29	光抱く友よ	高樹のぶ子	福岡在住、日経新聞に「甘苦上海」連載中の作者の芥川賞受賞作。大人しい優等生と早熟な不良少女という異なる性格の女子高生のふれあいと心の揺れるさまが描かれています。
30	マークスの山	高村 薫	本書や戦後政治がテーマの「新リア王」など、社会問題的な主題と硬い筆致、とっつきにくい感がありますが、読みだすと止められない。西日本新聞評論欄の発言も格調高く好きな作家。
31	血脈	佐藤愛子	作家である父佐藤紅緑、兄詩人のサトウハチローら破天荒な佐藤家の人々の凄絶な人生を描いた作品で、現代の家族のあり方を考えさせられます。チクリと辛口社会評論も面白い。
32	女たちのジハード	篠田節子	ジハードとは悪を取り除く聖なる戦い。本書は、5人のOLたちの生き方、つまり自分の内なる戦いを描いたものと読みました。現実にも悩み戦い、そして幸せをゲットする、元気が出ます。
33	博士の愛した数式	小川洋子	80分しか記憶が持続しない数学者の博士とお手伝いさんとその息子ルート君のふれあい、完全数(判りますか?)を中心に作中の数式は一編の詩のように感じられます。
34	センセイの鞆	川上弘美	ゆったり、淡々とした大人の恋愛を温かい情景につつま描いた大人の小説。芥川賞受賞の「蛇を踏む」は、ちょっと難しかったですが、本書は和みたい時のおすすめ。
35	模倣犯	宮部みゆき	女性作家のサスペンスものとして読みましたが、主題は完全犯罪を意図する犯人ではなく、その家族、被害者とその家族でした。社会小説とでもいう範疇にあるもの、ご一読を。
36	写楽まぼろし	杉本章子	浮世絵が好きで、タイトルにそそられてよみました。たった10カ月しか活動しなかった幻の浮世絵師の話。著者略歴を見ると福岡県出身。時代もののちょっとひねった面白い作品です。
37	閔妃<ミンピ>暗殺	角田房子	朝鮮王朝の最後、国母とも権力濫用者ともされる女性を主題にした「小説」、日韓のみならず、当時のロシアや中国の関与もあり、まさに過去にあった小説としての歴史です。手持ちの文庫本は、数年前に急逝されたWHO事務局長李鍾郁<イジョンウク>博士から頂いたもの。
38	装いせよ、わが魂よ	高橋たか子	常に常に、欲望が女と男をひきつけ、夢が女と男をひきつける。けれども誰も、欲望や夢の行方を知らない、との著者の言葉忘れていませんが、複雑な男女関係を描いています。
39	臍の緒は妙薬	河野多恵子	「幼児狩り」、「血と貝殻」など、ちょっとpsychoな河野ワールドとよばれる作家ですが、人間の根源について書かれている様な・・・気がします。長年、アメリカにお住まいでした。
40	ローマ人の物語	塩野七生	毎年1巻づつ、15年かかった著者のライフワーク。古代ローマ史ブームのきっかけを作りました。一大帝国の興亡の歴史ですが、爾来、世界はその繰り返しのようにも思います。
41	こころの旅	神谷美恵子	ハンセン病者支援に尽くされた精神科医、学生時代のめりこみました。海外生活が長かったからだけでない体系的研修による語学と深く広い教養。著作集10巻は海外勤務にも持参。
42	苦海浄土：わが水俣病	石牟礼道子	大学から3時間ほど、有明海に面する水俣が、何故、MINAMATAとして世界に知られているのか。水俣ご出身の著者によるミナマタの書、赤十字の理念を考える上でも必読書です。
43	家族の樹	澤地久枝	著者の代表作「滄海くウミよ眠れ」はミッドウェー海戦がテーマ。その最終章ともいえるドキュメンタリー。実は、アメリカでの取材のお供をし、私のことも出ていますので取り上げました。
44	流れる星は生きている	藤原てい	満州からの引き揚げ時の記録。過酷な状況下に、母が必死で守った子どもが、「国家の品格」の著者お茶の水大の数学教授藤原正彦先生。私にも同様の厳しい思い出があります。
45	嘘つきアーニヤの真つ赤な真実	米原万里	幼い頃、チェコプラハのソビエト学校で学んだ著者の30年後の同級生との再会記。彼女たちのその後の人生を通して、東欧の現代史が鮮やかに浮かび上がります。
46	絶対音感	最相葉月	音楽家の必須資質についてのノンフィクション。著者が生命科学問題を医学・哲学・宗教界の専門家と対話する「いのち：生命科学に言葉はあるか」も看護学生として読んで欲しい。
47	日本語が亡びるとき	水村美苗	12歳から米国で暮らし、教育・研究者生活も送られた著者は、学術的な作風だが、日本語こそが日本の大事な文化とする。漱石の続編の形の「續明暗」、「本格小説」なども興味深い。
48	金子みすゞ童謡全集：現代仮名づかい版	金子みすゞ	小さいもの、弱いものに愛情を注いだ詩人、金子みすゞ。平易でしかし美しい日本語の響きと優しい感性、声を出して、decentに読んで下さい。日本の文化に触れられます。
49	私の仕事：国連難民高等弁務官の十年と平和の構築	緒方貞子	緒方貞子国連難民高等弁務官のオフィスへは、WHO勤務時に数度うかがいました。本書は日記・インタビューで、先生の難民支援への考え、活動、当時の国際社会状況を伝えます。
50	橋のない川	住井すゑ	部落差別問題に正面から取り組んだ大作、気合いを入れて読まねばなりません。もう入手不可ですが、著者は、1955年、小学館幼年文庫にナイチンゲールを書かれています。

	書名	編著者名	一言コメント
51	散るぞ悲しき：硫黄島総指揮官・栗林忠道	梯久美子	玉碎(判りますか?)が当たり前の戦時、本土防衛のための硫黄島死守という使命を全うした司令官は、部下の死を「散るぞ悲しき」と悼み、また家族を思うhumanな人物だった。
52	タテ社会の人間関係	中根千枝	「タテ」と「ヨコ」、「場」と「資格」などの概念で、日本社会の構造をわかりやすく分析しています。40年にわたりロングセラーを続ける新書です。
53	いのちの文化人類学	波平恵美子	文化には、その文化固有の生命観があります。尊厳死、臓器移植、遺伝子治療、いのちに関わる問題を文化人類学の視点で考える…本学でも講義がはじまります。
54	枕草子remix	酒井順子	「負け犬の遠吠え」の著者が、随筆古典を現代語訳し、作者清少納言を紹介したものと云えます。著者の、機知にとんだ軽妙な語りで枕草子が身近になる、古文嫌いにもおすすめ。
55	「父の娘」たち：森茉莉とアナイス・ニン	矢川澄子	少女期の父が人生に多大な影響を与えた森茉莉(森鷗外の娘)とアナイス・ニン(仏作家、11歳から死の2カ月前までの日記が出版されている)の二人を並べた興味深い作品です。
56	生き延びるための思想：ジェンダー平等の罨	上野千鶴子	「近代家族の成立と終焉」などの学術書も多数のバリバリの社会学、ジェンダー論の第一人者。私に欠落している社会的知識を頂けるのですが、ちょっと、ついていけない時も。
57	東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ	遥 洋子	大阪に足場をおくタレントの著書ですが面白い。知らず知らずに、ある種の知識を得ています。「ケンカ」を真面目に取り上げないこと、関西出身者には判りやすいかも知れませんが。
58	14歳からの哲学：考えるための教科書	池田晶子	「帰ってきたソクラテス」などの著書で哲学(という難しそうな分野)が身近になった人いるでしょう。自分とは?人はなぜ生きるか?生の意味とは?を考えるきっかけを与えてくれます。
59	「死への準備」日記	千葉敦子	がん闘病中、自らの意思で、充実した生活を送り、その経過・様子をレポートしたジャーナリスト。病氣と向き合う冷静かつ積極的な態度にある種の強さと感銘を受けます。
60	ゲノムが語る生命：新しい知の創出	中村桂子	生命科学の解説書を多数書かれている著者が、生きる・変わる・重ねる・考える・耐える・愛づる・語る、という7語で知の可能性と人間として生きることを問われている書です。
61	二重らせんの私	柳澤桂子	生命学者として、また、原因不明の難病に罹患されたからでしょうか、宗教にも造詣深く、最近では歌人でもある著者による生命科学の入門書、看護学生の必読書でもある。
62	凜として看護	久松シソノ	長崎で被爆しながら、師永井隆博士と看護に当たられた記録。平和のメッセンジャー、看護教育の先達、ナイチンゲール記章授賞された時、お目にかかりましたが、1月にご逝去。
63	いのちをつないで：むなかた助産院からのメッセージ	賀久はつ	宗像市内で助産院を開設している著者。多くのいのちの誕生に立ち会った経験から、よく生まれ、よく生きて、よい終わりについて語っています。講義や実習でお目にかかるかも。
64	いのちへの旅：韓国・沖縄・宗像	森崎和江	朝鮮慶尚北道生まれ、宗像市在住の詩人・作家。半島の自然への憧憬と過去の侵略への原罪意識の上に、両「地域」交流を進めておられます。どこかでお見かけするかも。
65	女歌の百年	道浦母都子	全共闘時代(って古いですね)を代表する歌人とされますが、本書は、有名な「やわ肌の熱き血潮に触れも見で・(与謝野晶子 1901)」から100年間の女性の和歌の精神史です。
66	あなたと読む恋の歌百首	俵 万智	五七五七七の定型の中から、溢れる思いがこぼれます。恋を歌った百首の中から、お気に入りの一首を見つけてみてはいかがでしょう。
67	100万回生きたねこ	佐野洋子	100万回の生と死を経験したネコが、白いメスネコに出会い、初めて他者を想うということを知ります。シンプルな絵本ですが、まさに「いのちを考える」一冊。
68	崩壊の予兆	ローリー・ギャレット	世界の公衆衛生が破綻し、健康の危機が迫っている、どう立ち向かうかを警告する書。日本の健康を守るためにも、保健医療者として前著「迫り来る病原体の恐怖」とあわせて必読。
69	赤毛のアン	L. M. モンゴメリ	50年以上前から何度も読み、少女小説、人生指針として今は哲学書です。面白く読後は元気になれる本。脳科学者茂木健一郎『「赤毛のアン」に学ぶ幸福になる方法』もおすすめ。
70	嵐が丘	エミリー・ブロンテ	19世紀を代表するイギリス文学。スコットランドの荒野を舞台に、人間の愛憎を深く描いた作品です。読後、荒野の風景と個性の強い登場人物たちが深く心に残ります。
71	ジェーン・エア	シャーロット・ブロンテ	幼くして孤児となった主人公の自立的な人生を描いていますが、主要な人物の死因は結核など感染症、ナイチンゲールが出る19世紀中葉のイギリスの状況が判ります。
72	高慢と偏見	ジェイン・オースティン	18世紀初頭のイギリス田舎の上流階級が舞台の恋愛小説。当時、自立する道のない女性にとって結婚できるかどうかは一大事、今の途上国の女性の問題と類似しています。
73	波	ヴァージニア・ウルフ	「ダロウェイ夫人」、「灯台へ」も好きですが、6人の独白による人生を海辺の暁から宵と対比させつつ、さらに意識の流れが描かれています。学生時代、バイトして全集を買いました。
74	風と共に去りぬ	マーガレット・ミッチェル	作品はこれ一冊の著者ですが、大ヒット映画もあって、最もよく知られた本のひとつです。映画では主人公スカーレット・オハラを演じたヴィヴィアン・リーの印象も鮮烈でした。
75	春にして君を離れ	アガサ・クリスティ	ミステリー作家としての印象が強い著者ですが、この作品はいわゆる推理ものではありません。読後、怖さや哀しさなど、複雑な感情を抱きます。
76	大地	パール・バック	中国名「賽珍珠」を持つ米作家の原作は1931年。学生時代に読んで感動しましたが、再読すると、貧困と飢餓、自然災害と紛争が物語の背景でした。再び、引き込まれてしまいました。
77	航路	コニー・ウィリス	主題はNDE(Near Death Experience、臨死体験)、著者はSF(Science Fiction)作家とされていますが、本書はミステリーか医学小説。大作ですが、最終章が一番すごいです。
78	悲しみよこんにちは	フランソワーズ・サガン	フランスの作家サガンの鮮烈なデビュー作。怠惰な青春を謳歌する金持ち娘の残忍さを描いた世界的なベストセラー、フランス語勉強の動機となりました。

	書名	編著者名	一言コメント
79	海からの贈物	アン・モロー・リンドバーグ	多忙な都会生活や毎日の雑事にかまけて見失ってゆく自分自身を取り戻せる本です。ゆったりと自分(の心)に向き合う大切さ、シンプルに生きるということについて教えてください。
80	小公子	フランシス・バーネット	第二次世界大戦後の、まだ、童話などが十分手に入らなかった頃、叔母のひとりが買ってくれた私自身所有の最初の本でした。後に、この著者の「秘密の花園」も好きになりました。
81	旅のはじめに: ニューヨーク知識人の肖像	ダイアナ・トリリング	高名な批評家ライオネルの妻、自らも一流の文芸および政治・社会批評家である著者が8年をかけ、視力を失った後は口述で完成させた自伝、良きアメリカの知性の結晶です。
82	アフリカの日々	アイザック・ディネーセン	著者はデンマークの女性作家(カレン・ブリクセン)。20世紀初頭のケニア、コーヒー園経営の失敗と私生活破綻、しかし現地の人々への熱いまなざしは開発学の勉強になります。
83	森の旅人	ジェーン・グドール	アフリカとチンパンジーに魅せられ、ゴンベの森(タンザニア)に生きる女性霊長類学者の自伝。世界的問題、特に開発や環境を考えさせられる書。グドール協会に入ったこともあります。
84	バーガーの娘	ナディン・ゴードイム	アパルトヘイトの南ア、差別・偏見と闘った医師バーガーの娘が、自らの存在意味を探す葛藤の記。難しいけど読みこなして欲しい。私のお勧めアフリカ三大作品は82, 83とこれ。
85	わが人生	キャサリン・グラハム	ワシントン・ポストというアメリカの新聞社主の波乱万丈の人生記。650頁を読みきるには週末が必要ですが、書くのに6年かかった知性と良識あるビジネス女性の言葉は重いです。
86	センス・オブ・ワンダー	レーチェル・ルイス・カーソン	著者は「沈黙の春」で環境汚染にいち早く警鐘を鳴らした海洋生物学者。自然の営みの美しさと素晴らしさを平易な言葉で私たちに語りかけています。環境と健康の副読本。
87	ワイルド・スワン	ユン・チアン	パール・バックの再来とも云われる著者、祖母、母、著者と自分の家系三代にわたる現代中国を背景とする自伝。歴史に翻弄されながらもたくましく生きる人々の姿は圧巻です。
88	隠喩としての病い	スーザン・ソントグ	2004年白血病で亡くなるまで、近代を代表する米評論家。本書は、病の持つ隠喩(判りますか?)を意識化しています。「反解釈」など、取り付きにくい題名が多いですが、読んで欲しい。
89	家庭の医学	レベッカ・ブラウン	母親が死に至る看取りのプロセスを丁寧に綴った本書。大げさな感情表現を廃した文章と、看取りの日常を表現した客観的な筆致に、静かな感動が心に残ります。
90	アンネの日記	アンネ・フランク	あまりにもあまりにも、有名な本書です。今一度、隠れ家のアンネの生活を想像して読み、そして不穏な現代における歴史的な背景、自由と平和にも考えを及ぼして下さい。
91	黙して、励め：病院看護を拓いた看護修道女たちの19世紀	シオバン・ネルソン	ナイチンゲールに始まる近代看護よりずっと前の時代、黙々と看護を実践してきた修道女たちがいた。社会、宗教、女性という視点から記された新しい看護史。
92	黙って行かせて	ヘルガ・シュナイダー	元ナチス親衛隊員であった母の娘である著者が、久々に再会した母に対する心の葛藤を描いています。人間の狡猾さや哀しさ、そして生きるための勇気が、静かに胸に迫ります。
93	死ぬ瞬間：死とその過程について	E・キューブラー・ロス	「On death and Dying」が「死の瞬間」として発売された頃、医師になりました。それから40年以上、医、特にターミナルケアの現場の古典ですね。TVで彼女の最後も放映されましたね。
94	菊と刀：日本文化の型	ルース・ベネディクト	文化人類学者の著者の日本文化調査研究は、米軍の日本占領に活用されたそうですが、本書は純粋に深い分析と洞察をもって行われた日本文化の研究書。社会学の古典です。
95	第二の性	シモーヌ・ド・ボエヴォワール	「人は女に生まれぬ。女になるのだ。」とは本書のあまりにも有名な一節ですが、「女は男で区別されている二番目の性」、とはその立場に甘んじている女性への批判でもあります。
96	人間の条件	ハンナ・アーレント	ドイツ生まれユダヤ系アメリカ人哲学者であるハンナの本は、決してやさしくありません。何度読んでも判ったとは云えませんが、何故か、困難に当たった時、手にしたくなります。
97	サモアの思春期	マーガレット・ミード	アメリカ文化人類学。サモアのフィールドワークをまとめた本書は祖国でベストセラーだったが、後に豪学者の研究で切り捨てられました。が、著者の立てたジェンダー論は不滅です。
98	ロザリンド・フランクリンとDNA: ぬすまれた栄光	アン・セイヤー	1953年、DNAの二重らせん構造が発見され、医学と生物学は新しい時代にはいりました。38歳で卵巣がんで亡くなった一人の女性物理学者がいたことを検証する書。
99	1945年のクリスマス：日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝	ベアテ・シロタ・ゴードン	ウィーン生まれユダヤ系ウクライナ人で米国籍。GHQ(連合軍総司令部)民政局スタッフとして日本国憲法の草案、特に人権にかかわる部分の草案を作った女性の自伝。
100	バード 日本紀行	イザベラ・バード	イギリスの女性旅行家の明治10年代(1870年代末)の東北旅行記。「世界中で日本ほど婦人が危険にも無作法な目にもあわず、まったく安全に旅行できる国はない」と書いている。

特別推薦書

橋をかける：子供時代の読書の思い出	美智子皇后陛下	日本の知性が凝集されています。WHO時代、会議で訪問したベルーで日本語TV放映を拝見し感動しました。1998年の第26回国際児童図書評議会でのビデオによる基調講演です。
看護覚え書：看護であること・看護でないこと	フロレンス・ナイチンゲール	ナイチンゲールの代表的著作、かつ看護の最重要な古典ですね。英語で読みましょう。